

(3) 主な漢詩以外の茶山ポエム

14 竹田夜帰

気きの合あつ仲なか間まと魚いさなと
 帰かえりの路みちは笑わらい声こゑ
 水鳥みづとりはバタバタと飛とびあがる
 竹田村たけだのむら 谷川たにがわわたる 橋はしの道みち
 蛍ほたるが飛とんで 群むれとんで
 夜よといつこのこ じうすあかり

原詩 「竹田夜帰」 前六一〇

魚伴携歸咲語喧 魚伴携へ帰れば

水禽驚起出林翻 水禽驚き起ち 林を出でて

竹田村畔溪橋路

蛍火羣飛夜不昏

(大意) 魚の仲間とつれだつての帰りの路は笑

い声のこぼやかなこと。ねむる入つていた水鳥が驚いて飛び出して舞い上がった。竹田村の谷川をいの橋をき路、螢火が群れとんで夜といつこのこほると暗くない

15 月を迎へる

山やまにお月つきをむかへ 月つきをむかへて
 えいせいひおひさびさの道みち
 もてる夕ゆふ日が まじらぬ月つきの影かげ
 やあれ来たぞと おお伸びすれば
 ねむらへ急いそぐ 鳥とりの背せに
 あらう お月つきをむかへ ちよとい里さとまわぬ

原詩 「所見」 前二一十八

登山待月生 山に登りて月の生るるを待つ

夕陽紅未衰 夕陽紅 未だ衰えず

月上身漸高 上りしの上の身は漸く高し

(大意) 高いところへ登って東の空から月が出るのを待っている。しかし、まだ夕日の名残は

西の空にある。こぼりへ登っては、来た方を振り返りながら段々と高い所へ登って行く。鳥の背中のふと急しくとねむらへ帰つて行く鳥の背中の上にも月が上つてくる。

19 花と和尚さん

国分寺くにわけのてらの和尚おしやうさん お花はなが好すき
 お金かねなんか ほしくない
 ところが和尚おしやうさん お金かねが欲ほしい
 年々珍種ねねんちんしゆの花はなを買かつたため
 そくて時には 山やまからおりて
 お布施おほせを集あつめて ちよとい里さとまわぬ

原詩 「聯句戲贈如實上人」 後一一〇

上人好事為花顛 上人好事 花のために顛

唯愛名花不愛錢 拙齋 ただ名花を愛して錢を愛

為是年年購奇種 是れ年々奇種を購う為

下山時乞衆生縁 晋帥 山を下つて時に乞う

(大意) 上人は好事家で、花のためには逆立ちして

も惜しくはない。ただ、立派な花を愛して、銭には愛着がない。だから、毎年花の奇種を購うために山から下りて(寺から里に出て)衆生に時々銭(お布施)を乞われぬ。(注)この句は拙齋(西山拙齋)と晋帥(菅茶山)が国分寺の如実上人をからかった詩である。

山と夏雲

天と地の境に 奇峰が連なっている
 緑の峰々のそのせいじつに
 紫色の峰がせりあがりついでに
 風が出てきた おっ、山が動く。
 いや、雲だ あれは大半が雲だ

原詩 「山維夏雲多」 後八一七

山は夏雲に雑して多し

奇峯烈天際 奇峯 天際に烈なり
 翠紫廻相分 翠紫廻に相分の
 風起俄移動 風起つて俄に移動し
 知佗半是雲 知んぬ 佗は半ば是れ雲なるを

花吹雪

(大意) 奇妙な雲が天のきわに列なっており、その山のみどり色と紫色とはるかに分かれて見える。そこへ風が起りつて、俄に奇峰が移動した。それで他の半分は奇峰でなくて、雲であったことが知られる。

花びらの群れは 狂ったように
 かぜを追い 吹雪となって 突っ走る
 蒼むす小径に降のそよひ

春日雑詩

風誘えば ぐるぐるの
 花の風の風下がり
 ひより 花のまじり 酒を酌せ
 花飛び来って ながすきに浮かひ
 帆になつて走る
 おお 花が 帆になつて走る

原詩 「春日雑詩」 前八一

花作顛狂逐午風 花は顛狂を作し午風を逐う
 半奔蒼徑半翻空 半は蒼徑に奔り半は空に翻る
 移茵獨就花前酌 茵を移し独り花前に就いて酌めば
 時亦飛來帆酒中 時に亦た飛來し酒中に帆す

(大意) 花はどうかしたか。午風に乘って走り出した。一部は蒼むすした小径へ急ぎ、一部は空に舞い上がる。敷物を移して独り桜の前で飲んでいて、時たま散った花びらが、杯の中へ落ちて来て、風が吹くと帆掛船のこをやり出した。

きのうの夜の 里の雨
 今朝の柳に 緑を添えた
 春色 日まじりあかくなひ
 吹く風 日まじりあかたかへ

アハハ春野にぞんや
 きみたち本をこじたまえ
 東の家から 魚をわけて
 西の隣は 美酒もつ
 つねつねとつて 高みに登りや
 見わたすかぎり 春ちはる

原詩 「春日雑詩 其の二」 前一一

郊村一夜雨 郊村一夜の雨
 更添柳梢緑 更に添う柳梢の緑
 春色日以深 春色日以つて深まる
 和風日以煥 和風日以つて煥なり
 將欲賞芳辰 將に芳辰を賞せんと欲し
 使兒輟踊読 兒をして踊読を輟しむ
 東舎持嘉魚 東舎は嘉魚を持し
 西隣攜芳醪 西隣は芳醪を携える
 相將上高原 相將つて高原の上る
 聊以縱遠目 聊か以て遠目を縦にす

(大意) 村里は一夜の雨で、一段と柳の緑がつややかになった。春色は日まじり深まる風がだんだんと温かくなる。そこで、春景色を楽しもうと思つて、弟子たちに踊読をやめさせた。東の家からいい魚を持ちつてくるし、西隣からはつまみ酒を提げてきた。連れ立って高原に登り、手近で遠くまで広がる春を心行くまで眺めた

川岸暮色

あたりは墨色 暮れなずみ
 砂の入江はまだ明るい
 丸い入江は鏡のよう
 夕日の名残りを照り返し
 柳の林をぼつて照らす

あたりの墨色 暮れなずみ
 水を入だてて母子の牛が
 呼んで恋える
 川岸のあたりは墨色
 暮れなずみ

原詩 「路上」
 反照入楊林 反照楊林に入る
 沙灣晚未暝 沙灣 晚に未だ暝からず
 母牛與犢兒 母牛と犢兒と
 隔水相呼應 水を隔てて 相呼び恋う

(大意) 夕日が照り返して柳の林にうつりついでる。
 ために砂の灣になつてゐる所は、晩になつても
 未だ暗くならない。その入江に母牛と子牛が川の水
 を隔てて呼び合つてゐる。

蓮とる少女

蓮探る少女は 年令十五
 人目をほじらい 花陰を出でず
 風おこり 花みだれて
 見え隠れする 黒き横髪

原詩
 十五採蓮女 十五採蓮の女
 羞人不出花 人を羞して花を出ず
 風起花繚乱 風起つて花繚乱
 時々露鬢鴉 時々鬢鴉を露わす

(大意) 略

学校の秋見つけた

秋はどこからはやく来る
 それは学校がいちばん早い
 ほらね 生徒の挨拶きびきびと
 教える声も さやかに
 灯火親しむ しずかな音と
 書物をめぐる 午後の風
 秋はどこから はやく来る
 それは学校もつ来てる

原詩 「学宮早秋」

何處秋來早 何の処か秋來たること早く
 秋來古学宮 秋は来る古学宮
 禮容趨始健 禮容趨るごとく 始て健に
 講舌濁方融 講舌濁方に融す
 人各親宵燭 人は各 宵燭を親しむ
 書堪曝午風 書は午風に曝すに堪たり
 秋來何處早 秋來る何の処か早く
 秋在学宮中 秋は学宮の中に在り

蝶七首 (七)

風風をぞと 木の花散つた
 蝶があわてて仲間かと
 飛んで追いかけて いっしょに落ちた
 これはしまった 花だった
 あわてて蝶は飛ひかえり
 枝にとまって 知らん顔

原詩 「蝶七首 (七) 後八—二—」
 衝風觸花樹 衝風花樹に触れ
 花落撲吟榻 花落ちて吟榻を撲し
 一片忽環枝 一片 忽 枝に環る
 知佗是蝴蝶 知んぬ 佗是蝴蝶なるを

27 蝶七首(五)

もしもだね
野山に遊んで道はたつ
僕なら蝶にひいていくな
蝶の心を知っているから
なげこつて
蝶は花いっぱい咲いている所へ行くもんな

原詩 「蝶七首(五) 後八一—
行楽若迷岐 行楽若し岐に迷わば
宜随蝴蝶去 宜し蝴蝶に随うて去るべし
吾知心蝴蝶 吾蝴蝶心を知る
會向花多處 會す花多き處に向ふ

28 冬至(備後弁で意識)

年もうとひやんとした七十五
川や山にやあ また春が来つに
髪やあ 短くなるはあぢや
いつか 長ちゃんが生やんほっかなあ

原詩 「冬至」 遺一—一〇
衰老七十五 衰老七十五
江山復一陽 江山復た一陽
鬢絲隨日短 鬢糸日に随うて短し
何歳解添長 何の歳か解く長きを添えん

29 峠村

花のお山に おかこで入れば
花の谷から かおのがうん
花の行く手で 雉が鳴き
花の川面に 蝶が舞う

原詩 「峠村」 遺八一—三
筍輿行覺近三芳 筍輿行へ行く
風渡櫻花萬壑香 風は渡る 桜花万壑の香
一路雉鳴晴樹影 一路 雉鳴く晴樹の影
兩崖蝶戲午川光 兩崖 蝶は戯る
午川の光

(大意) 竹の駕籠に乗って進むと吉野が近くなったことがわかる。風が谷々の花の香を運んでくるからだ。吉野に続く山道の両側に繋る木々の間から、雉の鳴き声が聞こえ、谷の両側の切り立った岩のほらで、蝶が午後の光を受けて遊んでる

30 蝶の夢

おや 蝶が眠ってさな
くすりやと 眠ってさなんだね
どんな夢見ているの
花から花へ どの花もさう
迷ってさなのかな
教えてあげる 知っているから
村の辺りに 白いアンスの花が
咲き始めたら
それからね 山のふもとに
もう一つに 桃の花の花盛り

原詩 「蝶七首(三) 後八一—
蝴蝶春眠熟 蝴蝶春眠熟す
夢迷花氣中 夢は迷う 花氣の中
村邊初杏白 村辺 初めて杏白く
源裏正桃紅 源裏正に桃 紅なり

(大意) 蝶の春眠が深いらしい。夢は花の香の中で迷っているのだらう。村のあたりにはアンスの花が白く、桃源郷よろしく桃は紅に咲いて春はまさにたけなわだ。

31 ホタル

毎夜 子ごもたちが螢をとりて
籠につばいだ
柳の木にかけて涼み台を照らす
子ごもは 螢の光も本當の火だといふ
「扇をあおいともえぬよ」
「手をかきよめてあただからよ」と

原詩 「第七首」(五) 後七—三

連夜収来満練囊 連夜収め来たつて練囊に満つ
柳陰懸照納涼牀 柳陰懸けて照らす納涼の牀
童言螢火亦眞火 童は言つ 螢火も亦眞火
揺扇將然加手陽 扇を揺がせば 將に然えん
とて手を加ふれば陽しと

(大意) 毎夜、螢を捕えて練り綿の螢籠に一杯だ。
柳の木に懸けて涼み台を照らす。童は螢の火も
本當の火だよ。

「ほら、扇であおいと燃えるし、手を添えれば
あただからよ」と。

32 うしむんじつ

葉はうす絹の帯のよう
実は鮫皮の箱のよう
この奇妙な品種は
いつの頃 南の海を渡って来たのだらう
秋風が田畑の作物を吹き抜けるとき
たぐさぐさのほつす(法皇)のような
長い紫の毛がゆれてくる
変なもんだな

原詩 「玉蜀黍」 後四—一〇

葉如羅帶實鮫函 葉は羅帯の如く 実は鮫函
奇種何年来海南 奇種何れの年か 海南よりの来
怪見秋風動禾黍 怪しみ見る 秋風禾黍を動
たりし
かせば
幾枝旣拂紫蓼々 幾枝の旣拂 紫蓼々たるを

(大意) 葉は白絹の帯、実は鮫皮の箱のような玉
蜀黍、この珍しい品はいつ頃海南から輸入され
たものなのか。秋風が稲や黍を吹いてゆするとい
多くの払子のようない長い紫色の毛をゆめゆめゆめ
せてくるのは見れば見るほど珍しいものだ。

33 病中暑憶旧時 病中の暑 旧時を憶つ

暑のがれて 数巾中行けば
苔は青々 地面をおおい
ちりしも 見えやせぬ
鏡にまける きれいな泉
捧げ飲もうと 差し出した手も
思わず引ひ込む ひややかな

原詩 「病中暑甚憶舊時而作六首」(二)

路逃炎暑入叢筠 路 炎暑を逃れて叢筠に入る
滿地青苔無點塵 滿地の青苔塵を點するなし
中有檻泉明似鏡 中に檻泉有りて 鏡似りも
明らかなり
就将捧飲手先龜 就いて捧げ飲まんとすれば
手先す龜す

(大意) 暑さをよけて竹やぶの道を行く。そのう
一帶をおおう青い苔には塵が一つもない。中に
泉があり鏡のように澄んだ水をたたえている。
面手ですくって飲もうとしたら、意外に冷たく
思わず龜のよりに手を引いた。

賞梅

梅のかおる夜じゃった 野みちで
 美しい女人に出逢つての
 あじになり さきになり
 それは樂しもう 一緒に帰らしたんよ
 その女人はの 白い上衣に青いスカート
 顔は玉のよじりじゃかぞ
 唐国のお人のやうじゃった
 そぞろ歩きを続けてな
 とある大きな梅の古木のもとに
 立った時じゃった
 女人はふつとかき消えてしもうたんよ
 ぶーっとな
 あたりには梅のかおりが
 においたっておった
 花も木も 人かげも
 なーんもなかつた なーんもな
 ただ蛾眉のような月が
 中天にかかつておったな
 梅のかおりの それはそれは
 かぐわしい夜じゃった

原詩 「賞梅」 梅(八) 後二一九

偶逢遊女後先還 偶またま遊女に逢つて

後先して還る

素袂青裙玉作顔 素袂青裙 玉を顔と作す

行入梅花忽相失 行きて梅花に入つて忽ち相失す

相失す

賸光横路月彎彎 賸光路に横たわつて月彎々

(大意) 梅見でたまたま遊女に逢い、後になり先に

なつて帰つた。白い袂青い裙を翻している。

顔はこの世のものならず美しい。とかくするうち

に花の中に入つたと思つ間に見失つてしまった。い

やが上にも芳香がたちこめ、空には三日月が清々し

い。さてはさつきであつたのは花の精だつたのか。

夏目雑詩

ひでのり田では 水あつそい
 あつちで がやがや こつちでわいわい
 たいまつかかげて 見はりの番
 夜なお 明るい あぜみち こみち
 村のかあちゃん かけつけろ
 左にあかちゃん 右手に弁当

原詩 「夏目雑詩十二首(八)」 後八一二十

早田争水四郊喧 早田水を争つて四郊

處處松明路不昏 処々の松明 路昏か

村婦夜深來慰勞 村婦 夜深く来りて

左懐孩乳右盤飧 左に孩乳を懐き 右には盤飧

左懐孩乳右盤飧

左に孩乳を懐き

右には盤飧

(大意) 日照り続きで田入水を引く争いで、どの村も

騒がしい。処々に松明が燃えて夜道も明るい。おか

みさんが、夜ふけて夫たちの慰勞にやって来た。見

ると左わきには乳児を抱え、右手には大きな弁当の

大きな包みを提げている。

つかの間の光景

軒端に出づ 明かりを消す
 虫の音だけがあたりひびく
 月待し客をひきよめし
 向うの山を指さすは
 大きな月が松をかかえて昇ってきたよ

原詩 「即景」(一首) 前三—三二

南軒有待不燃燈 南軒待つ有り 燈を燃さず
 四壁蟲聲夜氣澄 四壁の虫声 夜気澄めり
 指點前峰留客坐 前峰を指點し 客を留めて

坐せば
 愛着大月抱松升 愛し着る 大月松を抱えて
 升るを

(大意) 南側の軒端へ座をじつらえて、燈もつけず今夜の月を待つ。あたり一帯は虫の音がにぎやかで、夜気が清々しい。客を引き留めて、家の前の山を指し示している。おもむくに大きな月が松を抱えて昇ってきたのは、思わず感嘆の声が出た。

牡丹 後四—二

すもも(李)も
 もも(桃)も散りました
 花の景色を訪もつにも
 野山の里も わかみど
 牡丹がみじかに咲きます
 こぼれわたし まかせて
 のしろの春を ひびく

原詩 「牡丹」 後四—二

李溪桃塙已成塵 李溪桃塙 已に塵と成り
 何處風光慰籍人 何処の風光が 人を慰籍せん

獨有牡丹尤解事 独り牡丹の尤も事を解する有り
 艶粧緩緩回殘春 艶粧緩緩として残春に向う

(大意) 深谷の李も土手の桃の花もすでに散ってしまつて、春の花は全て終わったように見える。どここの風光が人を慰めてくれるだろう。独り牡丹だけが大きく物わかりがいいと言わんばかりに美しい花の色香を見せつ、おもむくに残春を飾ってみせる。

春山

雨の日もやに包み
 晴の日 霞をかける
 やつと眉のうしろ春の山
 いまだ 化粧もとのわす
 ほんとは恥ずかしい春の山
 うすき化粧の装い
 訪ねし人に会うこともできず

原詩 「春山」 前五—二六

雨時烟霧晴時塵 雨時の烟霧 晴時の塵
 眉黛模糊粧末勻 眉黛 模糊として粧末
 だ匀わす

至竟春山足羞態 至竟 春山羞態足の
 不將淡掃面遊人 淡掃を將つて遊人に
 面せず

(大意) 雨の日ほもやがかり、晴れた日にはかすみ、春の山はほんのりと美人の眉を思わせつつたつぷり化粧が整つてはいない。春の山はまだ恥ずかしいんだな。どうせ淡化粧で探訪客の方へ顔を見せないらしい。

39 秋の草花 後七一九

夏のお花はもう散った
 菊が咲くの日は もう少し早
 黄色のかたまり おみなえし
 赤いとかすき ほじけのね
 野山に秋の花咲く日は
 小道の散歩がたのしいな

原詩 「秋日雑詠(一)」 後七一九
 蓮已催殘菊未開 蓮已催殘し 菊未だ開かず
 此時秋物各爭才 此の時秋物各おの才を争う
 遮人敗醬堆金粟 人を遮りて 敗醬金粟を堆へし
 沿路鷄腸捧玉杯 路に沿つて鷄腸玉杯を捧へ

(大意) 蓮の花は既に散り、菊の花はまだ開かない。この季節は、秋の草花が各々その美しさを競う。女郎花は人をさへぎって、金色の粟粒を積み上げ、ほじけのねは道端に玉杯をわねにこころ。

40 ゆゑ春

大川の雨 岸をうるおし
 若草びっしり背くらへて
 大川の風 落花にたむせれ
 花びらほろほろ かげりこころ
 千本万本 柳の糸が
 去りゆゑ春をひなごす
 うるせうはまなほ

原詩 「暮春」 前七一四
 江雨頻沾細草滋 江雨頻りに沾りて 細草滋し
 江風日滾落花吹 江風日びに落花を滾して吹く
 千糸万縷柳原柳 千糸万縷柳原の柳
 不繫狂春留少時 狂春を繫ぎて留まらざり少時なりし

(大意) 大川に雨がしきりに降りそそいで細かい草がびっしりと生えだした。川をわたる風は落花を押し流すほど吹いている。千本の糸万本の糸をたらしている柳原一帯の柳は、ゆゑ春をひなごすはなごすはなごすが、これのままならぬ。

41 秋の日

稲穂も たれて 黄金色
 谷間に見える家の影
 秋風 小風 日暮むね
 雪が降ったか コロンコロン
 家々綿花毛を乾して

原詩 秋日雑詠(九) 後七一九
 黄雲百頃擁人家 黄雲百頃人家を擁し
 暮閒涼生十里沙 暮閒涼を生ず十里の沙
 疑見山郷先降雪 疑い見る山郷先に雪を降りすなり
 満村晴照曝檀花 満村晴照檀花を曝す

(大意) 村の家々を黄金色の雲が覆い、川の広い砂浜では涼しきを感じぬ。頭を上げて山々を見てもあたかも雪が降ってきた。村ではどの家も取り入れた綿を陽にあてて干している

賞梅

流れに映った枝ぶりを

近く見るとはらさまだ

さびのほつりた

遠くまでまわって

舞臺のまわりの

心は

野川の舞臺

梅を訪ねて

なが

ちか

さび

とほ

まわりの

うたい

のがわ

あそび

原詩「梅田」後一一九

遍觀偏好臨流影

遍り観て偏に好し流に臨

影

遙遠逾佳倚竹姿

遙かに遠んで逾いよ佳な

姿

一歲會心何口口

一歳会心わの何わの口口

は

野航微雪訪君時

野航の微雪君を訪う時

(大意) 梅の花は近々見ゆめよ。三画し

映る姿も。ここも。ここも。ここも。ここも。

ついで咲く梅も。ここも。ここも。ここも。ここも。

ねの田だろ。梅の咲く。梅の咲く。梅の咲く。

川のほとりで淡雪の降の中を君(梅)を訪

ねる。